

【原著論文】

体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化： スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して

清宮 孝文¹⁾, 依田 充代²⁾, 門屋 貴久³⁾, 阿部 征大⁴⁾

¹⁾ 日本体育大学大学院博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

²⁾ 日本体育大学体育スポーツ科学系

³⁾ 松山大学, 日本体育大学大学院博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

⁴⁾ 神戸医療福祉大学, 日本体育大学大学院博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

Categorization of the image held by physical education university students on sports volunteering: Focusing on the characteristics of “motivated students” and “unmotivated students” in sports volunteer activities

KIYOMIYA Takafumi, YODA Mitsuyo, KADOYA Takahisa and ABE Yukihiro

Abstract: The purpose of this study is to clarify characteristics of “motivated students” and “unmotivated students” from the categorization of their image of sports volunteering by focusing on physical education university students. A method by Matsumoto (1999) and Tani et al. (2003) was used for the categorization, and a scale whose reliability and validity had been confirmed by Kiyomiya et al. (2020) was used for the survey items. The survey was administered to 755 physical education university students via a collective survey method using a questionnaire. Altogether, 696 students who did not provide incorrect answers or nonresponses in the questionnaire were selected as survey participants for the analysis. The analysis results showed that physical education university students could be categorized into five groups based on their image of sports volunteering: “obligation type,” “reciprocity type,” “labor type,” “contribution type,” and “spontaneous type.” Moreover, regarding the characteristics of “motivated students” and “unmotivated students” in sports volunteering, “motivated students” were women who hold a “reciprocity type,” “labor type,” or “voluntary type” image and have had experience in participating in sports volunteering. “Unmotivated students” were men who had an “obligation type” or “contribution type” image and have never had experiences in sports volunteering.

要旨：本研究は体育系大学生に着目し、スポーツボランティアに対するイメージの類型化から「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を明らかにすることを目的とした。類型化には松本（1999）と谷ほか（2003）の手法を用いて行い、調査内容には清宮ほか（2020）で信頼性および妥当性が確認されている尺度を使用した。調査は体育系大学生 755 名を対象に質問紙による集合調査法で実施し、質問紙に誤答や無回答がなかった 696 名を分析対象者とした。分析の結果、体育系大学生はスポーツボランティア活動に対して「義務型」、「互酬型」、「労働型」、「貢献型」、「自発型」の 5 つのイメージを持った集団に類型化された。また、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴として、「意欲的な学生」は「互酬型」、「労働型」、「自発型」のイメージを有する学生であり、女性とスポーツボランティア参加経験がある学生であった。「意欲的ではない学生」は「義務型」と「貢献型」のイメージを有する学生であり、男性とスポーツボランティア未経験者であった。

(Received: October 2, 2020 Accepted: December 1, 2020)

Key words: attribute comparison, cluster analysis, quantitative research

キーワード：属性の比較, クラスタ分析, 定量調査

1. 緒 言

2010年8月、「スポーツ立国戦略」が文部科学省(2010)によって策定された。この戦略の「基本的な考え方」には、スポーツを「する人」や「観る人」だけでなく、「支える人」にも重視すると記載されている。また、スポーツ庁(2017)の「第2期スポーツ基本計画」にはボランティア育成やボランティア人材の確保が掲げられ、さらに、2021年にはオリンピック・パラリンピックが東京(以下、2020年東京大会)で開催され、より一層、「支える人」であるスポーツボランティアが注目されると予想する。

2020年東京大会のスポーツボランティアの募集に際し、スポーツ庁(2018)は「平成32年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会特別措置法及び平成31年ラグビーワールドカップ大会特別措置法の一部を改正する法律による国民の祝日に関する法律の特例措置等を踏まえた対応について(通知)」を全国の大学長および高等専門学校長に出した。この通知は、「学生が、大学等での学修成果等を生かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の社会への円滑な移行促進の観点から意義があるもの」(スポーツ庁、2018)とし、2020年東京大会に合わせて、学事暦等の変更を各大学等に提案するものであった。この通知により、大学生および高等専門学校生は2020年東京大会のスポーツボランティアに申し込みしやすくなったと言えよう。一方で、「五輪ボランティア、国の旗振り波紋 20年東京大会、大学に協力求める通知」(朝日新聞、2018)では、学生を「まるで動員のよう」といった批判的な意見が出ている。確かに、自発性や公益性がないにも関わらず、スポーツボランティアに参加させる行為は動員にも取れるが、2020年東京大会のスポーツボランティア活動に参加したい学生にとっては、恩恵がある通知であったといえる。このように参加を希望しない者を中心とした議論が表出する理由として、スポーツボランティア活動への参加を希望する者と希望しない者の特徴が明確化されていないことが要因であると考えられる。参加への希望者の特徴を明らかにすることにより、例えば政府が提示するスポーツボランティア活動への募集に関わる通知が「動員」という捉え方から「恩恵」といった表現に変化すると推察する。すなわち、スポーツボランティア活動に自主的かつ公益性を持って参加する者の特徴や参加意欲のない者の特徴を整理することは、今後のスポーツボランティア募集に効果的な資料を得ることになる。

今回、特徴を整理する対象として選定したのは、体育・スポーツ系の学部属する学生(以下、体育系大

学生と表記する)である。前述したように大学生のスポーツボランティア活動を巡っては批判的な意見が表出しているが、スポーツ庁(2017)の「スポーツ基本計画」では、「指導者やボランティアの育成、アスリートのキャリア形成支援など、大学は質の高いスポーツ人材の育成に重要な役割を担っている」と表記されている。したがって、政府は大学をボランティアの育成に重要な機関として捉えており、今後も大学生のスポーツボランティア活動への参画を巡り、議論が繰り返されると推察する。中でも、スポーツ庁(2017)は「スポーツボランティア育成に係る大学の先進事例」を周知することを示しており、体育系大学生が在籍する大学がスポーツボランティア育成に関わる可能性が高いことが予測される。また、スポーツボランティア活動に意欲的であり、スポーツに関する知識および能力を有する体育系大学生は「より質の高いスポーツボランティア人材」(二宮、2017)になり得ることが予想され、本研究でスポーツボランティア活動に意欲的な体育系大学生の特徴を表出させることは、今後の「支える」スポーツにも貢献できると考える。

そこで、本研究は体育系大学生に着目し、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究の検討

2.1 参加動機に関する研究

まず初めに、本研究ではスポーツボランティアに対する体育系大学生の特徴をどのように捉えていくのかについて整理していく。

スポーツボランティア活動への参加を起因する要因として、参加動機に関する研究が多数報告されている(松本、1999;松岡・小笠原、2002;田引、2008;内藤、2009;松永、2012;小玉ほか、2016)。例えば、松本(1999)は障害者スポーツイベントにボランティアとして活動した者の参加動機として「ボランティア」、「自己成長」、「技術習得・発揮」、「レクリエーション」、「社会参加」、「他律参加」、「報酬」、「参加者交流支援」の8因子を抽出している。また、松岡・小笠原(2002)は非営利スポーツ組織に所属しているボランティア活動者の動機として、「社交」、「学習・経験」、「個人的興味」、「キャリア」、「自己陶冶」、「組織的義務」、「社会的義務」、「スポーツ」の8要素を抽出した。以上の参加動機に関する研究では、「社会参加」、「社会的義務」などの利他的動機、「自己成長」や「技術習得・発揮」、「学習・経験」などの利己的動機が存在している。さらに、「他律参加」や「組織的義務」「報酬」などのスポーツボランティアの定義^{注1)}とは異なる動機も抽出されている。しかし、これらの先行研究からは、スポーツ

ボランティア活動に参加した者の動機は表出しているが、スポーツボランティア活動に参加していない者の特徴は明らかになっていない。笹川スポーツ財団(2018)の「スポーツボランティアに関する調査」では、これまでにスポーツボランティアを行ったことがない人は85.3%となり、ほとんどの人がスポーツボランティア非参加者となる。内藤(2007)の研究では、中高保健体育教員免許や健康運動指導士などの資格取得を目指している学生が多い集団に調査を実施し、スポーツボランティア活動に参加したことがない学生の中で6割が参加を希望していることが報告されており、体育系大学生においてもスポーツボランティア活動を行いたいと潜在的に思っている者が多いことが予測される。

これまでのスポーツボランティア活動への参加動機に関する研究は、参加者の動機にアプローチすることで、今後のスポーツボランティア活動への参画を議論する視座であった。しかし、内藤(2007)が報告するようにスポーツボランティアに参加したいと思っている大学生が非参加者の中に6割存在する状況に至っては、非参加者視点からのアプローチが今後のスポーツボランティア参画人口増加に有効的であると推察する。そこで本研究では、スポーツボランティア非参加者の視点でアプローチするため、スポーツボランティアの捉え方から学生の特徴を表出していくことにした。すなわち、体育系大学生が抱くスポーツボランティアに対するイメージから各学生の特徴を捉えることにする。

2.2 ボランティアイメージに関する研究

ここでは、ボランティアに対するイメージと参加意欲の関連性について、先行研究から検討していく。

新出ほか(1998)は長野オリンピックに参加したボランティアに調査を行い、スポーツボランティアに対するイメージとして、「心的報酬」、「生活価値」、「心的条件」、「行動条件」、「社会貢献」、「自己批判」の6因子を抽出している。この研究からは、ボランティアを行う条件という因子が表出しているが、大きく分けると上述した参加動機にある利他的動機と利己的動機に関連する因子が見られる。しかし、新出ほか(1998)の研究もスポーツボランティア活動への参加者に着目しているため、全分野のボランティア活動を対象としている研究から知見を得る。

荒井(2016)は、大学生のボランティア活動へのイメージとして、「自己実現」、「親和援助」、「否定」、「強制無責任」、「具体的活動」の5因子を抽出した。この研究からは、参加意欲と関連する内容として、「自己実現イメージの増進が、ボランティア活動参加への内発

的・積極的な参加志向動機を高め、利己的・否定的な不参加志向動機を低める」ことが明らかにされている。また、倉掛・大谷(2004)は、利他的なボランティア観を有している学生よりも利己的なボランティア観を持つ学生の方がボランティア活動に参加する可能性があることを報告している。同様に、伊藤(2002)もボランティアへのイメージとボランティア活動への意欲の関係はかなり強いと述べている。

以上のように、スポーツボランティアに着目した研究の蓄積は少ないが、全分野のボランティア活動を対象にした研究では、ボランティアイメージとボランティア活動への参加意欲の関連性が確認されている。したがって、本研究が捉える学生の特徴(スポーツボランティアに対するイメージ)から参加意欲との関連性が確認できると予想する。

2.3 類型化に関する研究

次に、学生の特徴を捉えた後、どのような研究方法によってスポーツボランティア活動に対して「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を整理するのかについて検討していく。

スポーツボランティア活動への参加者をマネジメントする手法として、類型化が挙げられる。松本(1999)は国際的な障害者スポーツイベントに参加したボランティア466名の参加動機を分析し類型化を行った。その結果、「自発的貢献」、「他律対価」、「主体的レク」、「義務的参加」の4つに類型化し、参加者の指向性の違いを明確化した。同じく、谷ほか(2003)は障害者スポーツ指導者協議会に所属するボランティア506名のスポーツボランティア活動への期待を分析し類型化を試みた。その結果、「仲間づくり派」、「スポーツ技能提供派」、「活動消極派」、「社会貢献派」、「障害支援派」の5つに類型化し、参加者は活動に抱く期待によってボランティアサービスへの希望が異なることを明らかにした。さらに両者の研究では、参加者の指向性と活動期待に類型化した後、属性における比較分析を実施している。この手順により、どのような指向性あるいは活動期待が、どの集団に多い傾向にあるのかを表出することができ、今後のスポーツボランティア活動に対するマネジメントに寄与する研究となっている。

上述した研究(松本, 1999; 谷ほか, 2003)の手法は、本研究の目的達成に非常に有効的であり、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」のスポーツボランティアに対するイメージを明確化することができると考え、同様の分析手順を採用することにした。

2.4 本研究の枠組み

以上の先行研究から、本研究では学生の特徴をスポーツボランティアに対するイメージから捉え、その特徴を松本（1999）と谷ほか（2003）の手法を用いて類型化することにした。さらに、類型化された学生の特徴を属性比較によって分析し、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の属性を明確化することを目指す。

スポーツボランティアに対するイメージを捉える際には、体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの構造を明らかにした清宮ほか（2020）の因子項目を用いる。このスポーツボランティアに対するイメージの構造は、スポーツボランティアの参加動機研究の尺度を援用し、探索的に抽出した後、尺度の信頼性および妥当性が確認されている。

3. 方 法

3.1 調査対象者

本調査は、2019年7月および12月に体育系大学生が在籍するA大学の学生755名（男性434名・女性321名、1年生216名・3年生539名）を対象に質問紙による集合調査法で実施した。本研究では基本的属性から比較を行うことを目指していることから、性別の「男性」と「女性」、学年の「低学年」と「高学年」、クラブ・サークル等の「所属群」と「無所属群」、スポーツボランティア活動の「経験者」と「非経験者」を混在させたサンプリングを行うため、特定の運動部活動やゼミナール、セミナーなどではなく、A大学で必修授業として定められている授業において、アンケート調査の依頼を行った。質問紙回収後、スポーツボランティアに対するイメージおよび参加意欲の項目に書き漏らしのなかった696名（有効回答率：92.2%）を分析対象者とした。

3.2 調査項目

3.2.1 基本的属性

調査対象者の基本的属性を伺うため、性別、学年、クラブ・サークル等所属状況、スポーツボランティア参加経験の4項目を設定した。

3.2.2 スポーツボランティアに対するイメージ

スポーツボランティアに対するイメージの項目は、「あなたはスポーツボランティアをどのように思っていますか」という質問を設け、「1. 全くそう思わない」、「2. あまりそう思わない」、「3. どちらでもない」、「4. ややそう思う」、「5. 非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

使用する項目は、清宮ら（2020）の研究で信頼性および妥当性の確認がされている6因子23項目であっ

た。6因子は、「ボランティア精神」、「ポジティブな活動」、「他律参加」、「スポーツ技能の活用」、「報酬」、「所属先参加」で構成されている。

3.2.3 スポーツボランティアへの参加意欲

笹川スポーツ財団（2004）の「スポーツ・ボランティア・データブック」を参考に、参加したいスポーツボランティアとして「国際規模のスポーツボランティア」、「全国規模のスポーツボランティア」、「地域規模のスポーツボランティア」、「日常生活場面でのスポーツボランティア」の4項目を設定した。これらの項目に対し、「1. 全く参加したくない」、「2. あまり参加したくない」、「3. どちらでもない」、「4. やや参加したい」、「5. 非常に参加したい」の5件法で回答を求めた。

3.3 分析方法

清宮ほか（2020）の因子項目と本研究のデータとの適合度を確認するため、確認的因子分析を実施した。適合度指標は、Hair et al.（1998）の基準から $\chi^2/df \leq 3.00$, RMSEA<0.070, 小塩（2014）の基準からGFI>0.900, AGFI>0.900, CFI>0.900とした。また、データの内的整合性を確認するため、Cronbachの α 係数を用い、基準値は小塩（2018）から>0.70に設定した。

類型化の手順としては松本（1999）の研究を参考に分析を行った。まず始めにサンプルごとに因子得点を出すため、6因子23項目に対し、最尤法・プロマックス回転を用いて因子分析を行い、回帰法によって因子得点を算出した。次に、上記で因子ごとに得られた因子得点を用いて、Ward法による階層的クラスター分析を実施した。具体的には、6因子の因子得点を変数とし、Ward法かつ平方ユークリッド距離の測定方法を用いて、階層的クラスター分析を行った。その際、デントログラムからいくつかのグループに分けられるのか検討する。

得られたクラスターに対しては、特徴を検討するため、因子得点を説明変数、各クラスターを目的変数とし、一元配置分散分析を行った。その際、スポーツボランティアに対するイメージの視座から各クラスターの特徴を捉え、命名した。

その後、各クラスターと参加意欲の関連性を検証するため、各クラスターを目的変数、スポーツボランティアへの参加意欲を説明変数として、一元配置分散分析を実施した。その際、「国際規模」、「全国規模」、「地域規模」、「日常生活場面」の4つの項目から平均値を抽出し「参加意欲」としてまとめた項目を作成した。また、一元配置分散分析において、有意差が確認された項目に対しては、その後の検定へと進みTukeyによる多重比較を行った。

最後に、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を整理するため、基本的属性に対し各クラスターを用いてクロス集計による χ^2 検定を実施した。

尚、本研究の統計有意水準は5%未満とし、統計解析はSPSS Statistics 25およびSPSS AMOS 25を用いて行った。

3.4 倫理的配慮

調査対象者に対し、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を口頭にて説明し、同意が得られた方のみを対象に調査を行った。その際、無記名によるアンケート調査のため、調査対象者に不利益が被らないことも伝えた。また、本調査は日本体育大学倫理審査委員会の承認（承認番号：019-H063）を受けて行われた。

4. 結 果

4.1 基本的属性

表1は調査対象者の基本的属性を示したものである。性別は「男性」57.2%、「女性」42.8%となり、学年は「1年生」28.6%、「3年生」71.4%であった。次に、クラブ・サークル等への所属状況は「所属」69.3%、「無所属」30.7%となり、スポーツボランティア活動への参加経験は「経験あり」58.2%、「経験なし」40.4%であった。

4.2 確認的因子分析結果

表2はスポーツボランティアに対するイメージ23項目に対し、確認的因子分析を行った結果である。適合度は、 $\chi^2/df=2.98$, GFI=.93, AGFI=.91, CFI=.93, RMSEA=.05 となり、基準値を満たす結果となった。ま

表1 基本的属性

項目	度数	%
【性別】		
男性	398	57.2
女性	298	42.8
【学年】		
1年生	199	28.6
3年生	497	71.4
【クラブ・サークル等】		
所属	478	69.3
無所属	212	30.7
N.A	6	0.9
【参加経験】		
経験あり	405	58.2
経験なし	281	40.4
N.A	10	1.4

表2 確認的因子分析結果

【因子名】 項目	M	SD	因子 負荷量	α 係数
【ボランティア精神】				
社会への役立ちがある	4.40	.79	.83	.83
社会に貢献できる	4.45	.75	.82	
他者からの喜びがある	4.36	.78	.64	
他者への役立ちがある	4.55	.72	.64	
他者から感謝される	4.20	.84	.56	
【ポジティブな活動】				
退屈からの逃避をできる	2.92	1.12	.69	.82
リラックス効果がある	2.98	1.09	.67	
気分転換できる	3.44	1.10	.67	
自身の健康保持増進ができる	3.11	1.06	.67	
ストレス解消できる	2.79	1.15	.64	
余暇時間の有効利用ができる	3.60	1.07	.61	
【他律参加】				
他者からの強い依頼で行く	2.65	1.12	.74	.78
所属先で義務的に参加する	2.74	1.23	.67	
参加への義務感がある	3.09	1.14	.56	
所属先からの強い依頼で行く	3.19	1.12	.63	
大会からの依頼で行く	3.27	1.08	.58	
【スポーツ技能の活用】				
スポーツ経験を活用できる	4.03	.83	.76	.78
スポーツ技術を活用できる	3.90	.89	.68	
スポーツ知識を活用できる	4.11	.84	.77	
【報酬】				
金銭的報酬がある	2.58	1.26	.67	.73
報酬を得られる	3.06	1.17	.87	
【所属先での参加】				
所属先で参加する	3.37	1.04	.86	.74
所属先の仲間と参加する	3.62	1.03	.68	

※n=696, M=平均値, SD=標準偏差

適合度= $\chi^2/df=2.98$, GFI=.93, AGFI=.91, CFI=.93, RMSEA=.05

た、6因子のクロンバックの α 係数を算出したところ、「ボランティア精神」0.83、「ポジティブな活動」0.82、「他律参加」0.78、「スポーツ技能の活用」0.78、「報酬」0.73、「所属先参加」0.74となり、全ての因子において基準値を上回る結果となり、信頼性が確認された。したがって、清宮ら（2020）の尺度に当てはめた本研究のデータの妥当性および内的整合性が確認された。

4.3 スポーツボランティアに対するイメージの類型化

4.3.1 各クラスターの分布

6因子の因子得点を算出し階層的クラスター分析を行った結果、5つのクラスターが抽出された。表3は各クラスターの分布を示したものである。各クラスターへの調査対象者の分布は「第1クラスター」26.4%、「第2クラスター」20.5%、「第3クラスター」21.4%、「第4クラスター」16.2%、「第5クラスター」15.4%となった。

表3 各クラスターの分布

	第1 クラスター	第2 クラスター	第3 クラスター	第4 クラスター	第5 クラスター	合計
度数(%)	184(26.4)	143(20.5)	149(21.4)	113(16.2)	107(15.4)	696(100.0)

表4 因子ごとのクラスター間比較と類型化

因子名	第1 クラスター	第2 クラスター	第3 クラスター	第4 クラスター	第5 クラスター	F 値
	義務型	互酬型	労働型	貢献型	自発型	
ボランティア精神	-1.04	0.70	0.33	0.02	0.37	171.36***
ポジティブな活動	-0.17	0.29	0.76	-0.89	-0.21	87.12***
他律参加	0.39	-0.20	0.85	-0.40	-1.17	187.16***
スポーツ技能の活用	-0.67	0.74	0.49	-0.75	0.28	153.86***
報酬	0.25	-0.35	0.95	-0.69	-0.55	110.01***
所属先での参加	0.07	0.25	0.60	-0.01	-1.27	114.18***

***p<0.001

4.3.2 因子ごとのクラスター間比較

表4は6因子の因子得点を説明変数、5つのクラスターを目的変数として一元配置分散分析を行った結果である。全てのスポーツボランティアに対するイメージの因子において有意な差が認められた。

第1クラスターは「他律参加」が高い傾向を示し、「ボランティア精神」が最も低くなり、また「スポーツ技能の活用」および「ポジティブな活動」も低い傾向であった。したがって、スポーツボランティア活動は他律的に行うものとイメージしており、利他的にも利己的にも思っていない傾向にあることから、「義務型」と命名した。第2クラスターは「ボランティア精神」、「スポーツ技能の活用」が他のクラスターより高く、「ポジティブな活動」においてもやや高い傾向を示した。つまり、スポーツボランティア活動を利他的および利己的な活動とイメージしていることから、「互酬型」と命名した。第3クラスターは「他律参加」および「報酬」といった他律的および有償的なイメージで構成されている因子が高くなったが、他のスポーツボランティア活動に肯定的なイメージの因子（「ボランティア精神」、「ポジティブな活動」、「スポーツ技能の活用」）も高い値を示した。したがって、参加に際しては他律的なイメージが見受けられるが、活動後には金銭等の報酬を受け取れるとイメージしていることから、アルバイトと似た感覚を抱いている傾向にあり、「労働型」と命名した。第4クラスターは「ポジティブな活動」、「スポーツ技能の活用」、「報酬」が他のクラスターよりも低い値であったが、「ボランティア精神」に関してはほぼ中央値を示した。このクラスターは、社会貢献というイメージは完全に欠如してはいないが、自身に対して恩恵がない活動とイメージしている。すなわち、スポーツボランティア活動は自身の嫌なことでも奉仕

するものとイメージする傾向にあることから「貢献型」と命名した。第5クラスターは他律的な意味を含む「他律参加」および「所属先での参加」が他のクラスターよりも低く、「ボランティア精神」が高い値を示した。つまり、スポーツボランティア活動は自主的に参加するものと捉えている傾向にあり、利他的なイメージも抱いていることから、「自発型」と命名した。

4.4 イメージの類型による比較

4.4.1 スポーツボランティア活動への参加意欲比較

表5はスポーツボランティア活動への参加意欲に対し、イメージの類型で比較を行った結果である。全ての項目において有意な差が確認されたため、多重比較へと分析を進めた。スポーツボランティア活動への「参加意欲」では、「互酬型」が最も高い平均値を示し、多重比較では「互酬型」、「労働型」、「自発型」の方が「義務型」と「貢献型」よりも有意に高い値を示した。また、他の「全国規模」、「地域規模」、「日常生活場面」においても同様の結果となった。しかし、「国際規模」に関しては、「義務型」が他の全ての型よりも有意に低い値を示した。

4.4.2 基本的属性比較

表6は調査対象者の基本的属性に対し、イメージの類型で比較を行った結果である。カイ二乗検定の結果、性別とスポーツボランティア活動への参加経験に関しては有意な差が確認された。しかし、学年とクラブ・サークル等への所属状況では有意な差は確認できなかった。有意な差が確認された性別と参加経験に対しては、調整済み残差による残差分析も実施した。性別では「義務型」、「互酬型」、「自発型」において差が確認され、男性は「義務型」に多く属し、女性は「互酬型」と「自発型」に多く属している結果となった。参

表5 イメージの類型と参加意欲の比較

項目	義務型(A)	互酬型(B)	労働型(C)	貢献型(D)	自発型(E)	F 値	多重比較
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)		
参加意欲	3.29(0.97)	4.04(0.81)	4.02(0.71)	3.49(1.00)	3.91(0.93)	23.17***	A<B,C,E. D<B,C,E
国際規模	3.56(1.19)	4.27(0.91)	4.24(0.86)	3.93(1.16)	4.26(1.09)	14.17***	A<B,C,D,E
全国規模	3.45(1.16)	4.17(0.90)	4.15(0.93)	3.70(1.16)	4.10(1.12)	14.77***	A<B,C,E. D<B,C,E
地域規模	3.18(1.20)	3.92(1.04)	3.93(0.99)	3.29(1.24)	3.73(1.20)	14.90***	A<B,C,E. D<B,C,E
日常生活	2.95(1.20)	3.80(1.10)	3.77(1.04)	3.04(1.26)	3.54(1.31)	17.64***	A<B,C,E. D<B,C,E

※M=平均値, SD=標準偏差, ***p<0.001

表6 イメージの類型と属性比較

項目	義務型	互酬型	労働型	貢献型	自発型
	縦%(横%)	縦%(横%)	縦%(横%)	縦%(横%)	縦%(横%)
【性別($\chi^2=29.60$, $df=4$, $p<.001$)】					
男性 (398 名)	70.7(32.7)	46.9(16.8)	61.1(22.9)	56.6(16.1)	43.0(11.6)
女性 (298 名)	29.3(18.1)	53.1(25.5)	38.9(19.5)	43.4(16.4)	57.0(20.5)
【学年($\chi^2=8.56$, $df=4$, n.s.)】					
1 年生 (199 名)	20.7(19.1)	31.5(22.6)	28.9(21.6)	33.6(19.1)	32.7(17.6)
3 年生 (497 名)	79.3(29.4)	68.5(19.7)	71.1(21.3)	66.4(15.1)	67.3(14.5)
【クラブ・サークル($\chi^2=7.47$, $df=4$, n.s.)】					
所 属 (478 名)	67.4(25.5)	71.1(21.1)	74.8(23.0)	71.7(16.9)	59.8(13.4)
無所属 (212 名)	32.6(27.8)	28.9(19.3)	25.2(17.5)	28.3(15.1)	40.2(20.3)
【参加経験($\chi^2=12.76$, $df=4$, $p<.05$)】					
参加経験あり (405 名)	48.6(21.5)	62.6(21.5)	60.4(22.2)	60.7(16.8)	68.2(18.0)
参加経験なし (281 名)	51.4(32.7)	37.4(18.5)	39.6(21.0)	39.3(15.7)	31.8(12.1)

※アンダーラインは残差分析で差が認められた箇所を示す。

加経験では「義務型」と「自発型」において差が確認され、参加経験がある者は「自発型」に多く属し、参加経験がない者は「義務型」に多く属している結果となった。

5. 考 察

本研究の目的は、体育系大学生に着目し、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を類型化の試みから明らかにすることであった。

まず初めに、体育系大学生の全体的な特徴から捉えていくことにする。クラスター分析による類型化の結果、体育系大学生にはスポーツボランティアに対して「義務型」、「互酬型」、「労働型」、「貢献型」、「自発型」の5つのイメージを持つ集団に分けられることが明らかになった。中でも、スポーツボランティアを他律的に捉え、利他的とも利己的とも思っていない「義務型」が26.4%と最も多くなった。すなわち、体育系大学生で最も多いのは、スポーツボランティアをクラブ・サークルやゼミ活動から依頼を受けて行うものと捉え、社会にも自分自身にもメリットがないイメージ

している学生であることが示唆された。文部科学省(1998)の「我が国の文教施策」において、「学校教育では、小・中・高等学校を通じ、主として特別活動のクラブ活動や学校行事の勤労生産・奉仕的行事の中で、地域の実情に応じたボランティア活動が行われて」といると表記され、高村(2014)によって、学生のボランティア活動はサークル単位で行われる場合が多いことが報告されていることから、クラブ・サークルやゼミ活動などでボランティア活動に参加することは社会的通例となっていることが示唆される。しかし、学生の他律的な意識はスポーツボランティア活動を行う側も受け入れ側にも損失があると推察する。松永(2012)は「熱意のある自発的なスポーツボランティアを効率よく集め、ボランティアの動機に合った形で、適材適所にボランティアを配置し、有効に活用するためのしくみづくりは、成果を生み出す運営上、非常に重要である」と示し、自発的な活動者を集めた方が運営側に成果が生まれると述べている。また、大東ほか(2004)は「活動当事者のボランティア・イメージと学生のボランティア・イメージはかなり食い違っているところがある」と示し、そこから両者の軌

轍が生まれていることを報告している。したがって、現在「義務型」に属する学生に対してはスポーツボランティアの利他的や利己的な側面を教示する、もしくはスポーツボランティア活動に強制的に参加させない組織づくりが必要である。一方、次いで多くなった「労働型」は他律的なイメージでは「義務型」と同様の傾向を示したが、スポーツボランティアに対して肯定的なイメージを抱く傾向にあった。しかし、報酬を貰えるイメージが他の類型と比べ最も高い傾向を示し、この集団はスポーツボランティアをアルバイト感覚で捉えていることが示唆された。一般的にスポーツボランティアの定義は自発性、無償性、公共性が前提とされる活動となっているが、昨今では2020年東京大会のボランティアを巡り、「感動」を共有して人々を肯定的な参加へと駆り立てるような動員の力を「参加型権力」と批判する小笠原・山本（2019）の議論や無償性を前提に学生の募集を行うのは「学徒動員」と批判する本間（2018）の議論が表出している。清宮・依田（2019）の研究において「お金がない」ことを理由にスポーツボランティア活動に参加できていない学生の存在が示されていることから、有償ボランティアなどの定義にとらわれない活動を促進することが体育系大学生のスポーツボランティア活動へのさらなる参画に繋がると推察する。

次に、類型と参加意欲の関連性について考察していく。分散分析の結果、最も参加意欲が高かった類型は「互酬型」であった。この類型は、自発性や無償性、公益性などのスポーツボランティアの定義に沿ったイメージを有しており、利己的である「ポジティブな活動」や「スポーツ技能の活用」に関しても高い傾向であった。つまり、スポーツボランティアに対して利他的および利己的なイメージを持つ体育系大学生は最もスポーツボランティア活動に意欲的であることが示された。

多重比較の結果、全体的に「義務型」と「貢献型」が他の類型よりもスポーツボランティア活動への参加意欲が低いことが明らかになった。2つのタイプの共通点として、「ポジティブな活動」と「スポーツ技能の活用」が低いことが挙げられる。清宮ほか（2020）の研究では、「ポジティブな活動」と「スポーツ技能の活用」が参加意欲を向上させる要因であることが明らかになっている。つまり、体育系大学生のスポーツボランティア活動への参加には自身に恩恵があるイメージが最も重要な要素であることが明確化された。大学生を調査対象者とした荒井（2016）の研究では、ポジティブなイメージである「自己実現」^{注2)}の増進が参加志向動機を高めることが示された。また、Yuriev（2019）はボランティア活動からの離脱率が比較的低い学生ボ

ランティアグループへの調査を実施し、長期間ボランティア活動に参加しているのは外部に対するポジティブな期待が関連していることを明らかにした。この外部に対するポジティブな期待とは、新しい能力の習得や所属大学からの単位認定、経済的利益などがあると述べている。これらの先行研究から大学生はボランティアへの参加に何らかの恩恵を求めていることが明らかにされており、今回の対象者である体育系大学生に関しても同様の傾向を示したと推察する。

ここからは、スポーツボランティア活動に対し「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴を整理する。今回の分析では、「互酬型」、「労働型」、「自発型」は参加意欲が高く、「義務型」と「貢献型」は参加意欲が低い傾向にあった。これらの類型から基本的属性との比較を行った結果、以下のことが明らかになった。

第一に、性別比較では男性が「義務型」、女性が「互酬型」と「自発型」に多く属する傾向が示された。大学生を調査対象者にした先行研究を概観すると、ボランティア活動には男性よりも女性の方が積極的に関わりたいと思っている傾向にあった（倉掛・大谷，2004；岡鼻，2013）。また、新出（1998）は男性よりも女性の方が「心的報酬」^{注3)}因子が高いことを明らかにし、松本ほか（2004）は女性が組織コミットメントに関連する参加動機は「奉仕」と「自己実現」であることを示している。さらに、荒井（2016）は「女子が男子よりボランティア活動に対して、ポジティブなイメージと本来的なイメージを抱いている」と示している。したがって、総じて女性は男性よりもボランティア活動に対して意欲的であり、その理由としてポジティブなイメージを持っていること、またスポーツボランティアの定義と共通するイメージが内在していることが挙げられる。その結果、本研究においても「互酬型」と「自発型」に多く属したと推察される。反対に、男性は以上の先行研究（倉掛・大谷，2004；岡鼻，2013；荒井，2016）から女性よりもボランティア活動に対する参加意欲とポジティブなイメージが低い傾向にあることから、自身への恩恵がなく、他律的なイメージを有した「義務型」が多くなったと考える。障害者スポーツイベントに参加したボランティアを類型化した松本（1999）の研究でも、男性が女性よりも「義務的参加型」と「他律対価型」に多く属している結果となっており、実際にボランティア活動に参加している男性も本研究のイメージと同様、義務的や他律的な参加動機を有していることが示唆された。また、松野ほか（2012）はスポーツボランティア組織に所属する性差を明らかにし、男性は関係欲求の充足を求めるのに対し、女性は貢献意欲から参加していることを示した。つまり、男性と女

性では実際の参加動機にも差異が生じていることが推察される。

第二に、スポーツボランティア活動への参加経験における比較では参加経験がある者が「自発型」、参加経験がない者が「義務型」に多く属する傾向が示された。大学生を調査対象者とした研究を概観すると、常浦ほか（2016）は「スポーツボランティア活動に参加することによって、スポーツを支えるという視点が生じる」と述べている。また、小玉ほか（2016）はスポーツボランティア活動に複数回参加することで他律的な動機が薄れ、自主的に参加する活動的要素が強くなると報告している。さらに、岡鼻（2013）は「ボランティア活動経験が有る大学生は、ボランティア活動経験が無い大学生よりもボランティア活動を肯定的に評価している」と示している。したがって、スポーツボランティア経験者は総じてスポーツボランティアに対してポジティブなイメージを抱いている傾向にあり、能動的である「自発型」に多く属したと推察する。反対にスポーツボランティア未経験者は経験者よりもポジティブなイメージを抱いていない傾向にあり、「義務型」に多く属したと予測する。水野・加藤（2007）もボランティア活動経験が無い学生はボランティア活動に対して批判的なイメージが高く、期待感も低いことを明らかにしている。つまり、ボランティア活動に参加したことがある学生は、参加前からポジティブなイメージを有していた学生と参加後にポジティブなイメージを有した学生が存在することが考えられ、参加したことがない学生はネガティブなイメージを抱いているが故に参加経験が無いと推察する。しかし、スポーツボランティア活動への参加経験がある学生の中で38.3%が自身に恩恵がないとイメージし、参加意欲が低い傾向を示した「義務型」と「貢献型」に属していることから、必ずしも参加をすれば能動的になるという構図は成立しないことが明らかになった。

最後に、学年とクラブ・サークル等の所属状況で類型の比較を行ったが有意な差は見受けられなかった。しかし、学年では1年生は「互酬型」が最も多いのに対し、3年生は「義務型」が最も多い結果となった。したがって、大学での在学期間が長くなるにつれ、スポーツボランティアの実情を理解し、本来的なイメージから変化したことが予測される。クラブ・サークル等の所属状況では、地域スポーツイベントのボランティアスタッフとして近隣大学の体育会系部活動に所属する学生がスポーツボランティアの依頼を受けることがある（元嶋ほか、2016）という報告があることから、他律的なイメージが強くなると予想したが本研究では差異が確認されなかった。属性による細分化をさらに深めていくため、有意差がでなかった学年とクラブ・サー

クル等の所属状況については今後別の視点から追及していきたい。

6. まとめ

本研究の結果から、体育系大学生にはスポーツボランティアに対して「義務型」、「互酬型」、「労働型」、「貢献型」、「自発型」の5つのイメージを持った集団が存在することが明らかになった。また、スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴として、「意欲的な学生」は「互酬型」、「労働型」、「自発型」のイメージを有する学生であり、女性とスポーツボランティア参加経験が挙げられる。一方、「意欲的ではない学生」は「義務型」と「貢献型」のイメージを有する学生であり、男性とスポーツボランティア未経験者が挙げられる。

7. 今後の課題

今回は、松本（1999）と谷ほか（2003）の分析方法を参考に体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化を試みたが、さらなる精緻な解釈を行うため、クラスターごとの因子間比較など、今後は検定の方法を変えて分析していきたい。

また、分析の結果、性別とスポーツボランティア活動への参加経験の有無において、類型化に対し有意な差が確認されたことから、今後この2つの属性に対してはより詳細な調査および分析を試みる。

注

注1) スポーツボランティアについては、様々な団体や研究者が定義付けを行っている。武隅（1997）は「個人の自律的な決定と選択に基づく、公益性、非営利性を前提としたスポーツに関わる社会的活動、およびその行為主体」とし、スポーツにおけるボランティアの実態等に関する調査研究者協力者会議（2000）では「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的にささえたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営をささえる人のこと」と示されている。また、日本スポーツボランティア学会（2008）では「スポーツという文化の発展のために、金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人のこと」とされ、笹川スポーツ財団（2012）は「スポーツ・ボランティアとは、報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進のために行う活動のことを意味する」と定義付けしている。これらの定義からは、自発性、無償性、公益性が共通して含まれている。

注2) 荒井（2016）の研究で抽出された「自己実現」は、ボランティア活動について「勉強になるものである」、「自分のためになる」、「楽しいものである」、

「余暇の有効活用ができる」、「人生の生きがいになるものである」、「やりがいのあるものである」、「達成感が得られる」、「人と人とのふれ合いである」、「知識や経験が身に付くものである」とイメージする項目で構成されている。

注3) 新出 (1998) の研究で抽出された「心的報酬」は、ボランティア活動について「達成感が得られるもの」、「充実感が得られるもの」、「満足感が得られるもの」、「感動が得られるもの」、「喜びをわかち合うもの」、「視野が広がるもの」、「自分自身のため (学習) になるもの」とイメージする項目で構成されている。

文 献

- 荒井俊行 (2016) 大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌, 40(2): 85-94.
- 朝日新聞 (2018) 五輪ボランティア, 国の旗振り波紋 20 年東京大会, 大学に協力求める通知. 朝日新聞朝刊: 2018.09.18.
- Hair, J. F., Black, W., Babin, B., Anderson, R. E. and Tatham, R. L. (1998) Multivariate Data Analysis (5th ed.). Prentice Hall: New Jersey.
- 本間 龍 (2018) ブラックボランティア. KADOKAWA: 東京.
- 伊藤一統 (2002) 青少年のボランティアに関するイメージと経験についての調査研究. 中国四国教育学会教育学研究紀要, 48(1): 336-341.
- 清宮孝文・依田充代 (2019) 大学生のスポーツボランティアへの参加・不参加動機: 体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 25(1): 21-28.
- 清宮孝文・門屋貴久・依田充代・阿部征大 (2020) スポーツボランティアに対する認識と参加意欲の関係性: 体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 26(1): 1-14.
- 小玉京士郎・早田 剛・相澤 徹・河合洋二郎・村重良一 (2016) 障がい者スポーツボランティアに対する意識調査. 環太平洋大学研究紀要, 10: 237-242.
- 小塩真司 (2014) はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析 (第二版). 東京図書: 東京.
- 小塩真司 (2018) SPSS と Amos による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで—. 東京図書: 東京.
- 倉掛比呂美・大谷真史 (2004) 大学生にとってのボランティア活動の意味. 鳥取大学教育地域科学部紀要 (教育・人文科学), 5(2): 211-227.
- 文部科学省 (2010) スポーツ立国戦略, スポーツの振興, https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm, (参照日 2020 年 9 月 27 日).
- 文部省 (1998) 我が国の文教施策, 文部科学省, https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_100.html, (参照日 2020 年 9 月 27 日).
- 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して—. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5: 11-19.
- 松本耕二・北村尚浩・國本明德・仲野隆士 (2004) スポーツ・ボランティアの参加動機, 組織コミットメントと継続意欲—地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア—. 山口県体育学研究, 47: 13-22.
- 松永敬子 (2012) 「京都マラソン 2012」におけるボランティア参加者の動機に関する研究—自発的参加と非自発的参加との比較—. 龍谷大学経営学論集, 52(2-3): 55-63.
- 松野光範・佐野 薫・酒井博章 (2012) スポーツボランティア組織に参加する動機づけ要因の検証: コンサドーレ札幌のボランティア組織のアンケート調査より. 大阪学院大学経済論集, 26(2): 135-154.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機 (特集 スポーツ・ボランティア). 体育の科学, 52(4): 277-284.
- 水野邦夫・加藤登志郎 (2007) ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか?—ボランティア活動経験とパーソナリティ特性, 社会的スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた一考察. 聖泉論叢, 15: 141-156.
- 元嶋葉美香・宮良俊行・熊谷賢哉・金 相勲・田井健太郎 (2016) スポーツボランティア活動が体育会系部活動所属学生の気分状態に与える心理的影響: ボランティアスタッフの満足感に着目して. 長崎国際大学論叢, 16: 13-22.
- 内藤正和 (2007) 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究. 愛知学院大学心身科学部紀要, 3: 21-29.
- 内藤正和 (2009) 地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究—依頼型のボランティアに着目して—. 愛知学院大学心身科学部紀要, 5: 7-15.
- 日本スポーツボランティア学会 (2008) スポーツボランティア・ハンドブック. 明和出版: 東京.
- 二宮雅也 (2017) スポーツボランティア読本—「支えるスポーツ」の魅力とは? 悠光堂: 東京.
- 小笠原博毅・山本敦久 (2019) やっぱいいらない東京オリンピック. 岩波書店: 東京.
- 岡崎千尋 (2013) ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響. 心理科学, 34(2): 68-76.
- 大東貢生・柴田和子・湯川宗紀 (2004) ボランティア・イメージと活動経験の連関性. 国際社会文化研究所紀要, 6: 146-156.
- 笹川スポーツ財団 (2004) スポーツ・ボランティア・データブック. SSF 笹川スポーツ財団: 東京.
- 笹川スポーツ財団 (2012) スポーツライフ・データ 2012. 財団法人笹川スポーツ財団: 東京.
- 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツボランティアに関する調査 (2018 速報版), 調査・研究, https://www.ssf.or.jp/thinktank/volunteer/2018_spotreport.html, (参照日 2020 年 9 月 27 日).
- 新出昌明, 齋藤隆志, 川崎登志喜 (1998) 長野オリンピックにおけるボランティアのイメージ分析—スポーツ経営学的視点から—. 東海大学紀要体育学部, 28: 21-30.
- スポーツ庁 (2017) 第 2 期スポーツ基本計画について, スポーツ基本計画, https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiel

- dfile/2017/03/01/1382789_003_1.pdf, (参照日 2020 年 9 月 27 日).
- スポーツ庁 (2018) 平成 32 年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会特別措置法及び平成 31 年ラグビーワールドカップ大会特別措置法の一部を改正する法律による国民の祝日に関する法律の特例措置等を踏まえた対応について (通知), 平成 30 年度 告示・通達, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/hakusho/1407708.htm, (参照日 2020 年 9 月 27 日).
- スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議 (2000) スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書. スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議: 東京.
- 田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究, 4: 98-107.
- 武隅 晃 (1997) 「スポーツボランティア」概念の周辺. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 48: 57-70.
- 高村秀史 (2014) 地域と連携した総合型地域スポーツクラブにおける学生参画型プログラムの取り組み—ちびっこアジリティ教室を例として—. 日本福祉大学全学教育センター紀要, 2: 87-97.
- 谷 幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵 (2003) 障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究—活動期待の視点から—. 体育・スポーツ経営学研究, 18(1): 1-12.
- 常浦光希, 田原陽介, 山本孔一 (2016) スポーツボランティアにおける学習成果の仮説モデルの生成—Jリーグのボランティアを経験した大学生に着目して—. 環太平洋大学研究紀要, 10: 211-216.
- Yuriev, A (2019) Exploring dimensions of satisfaction experienced by student volunteers. Leisure/Loisir, 43(1): 55-78.

〈連絡先〉

著者名: 清宮孝文

住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属: 日本体育大学大学院博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

E-mail アドレス: 18pda04@nittai.ac.jp